

## 幼児期の家庭支援についての一考察

飛 田 隆

### 1. はじめに

家庭支援を保育所と幼稚園教育の視点から考えたい、「保育領域において家庭支援の必要性が意識され、かつ制度的に位置づけられるようになったのは1980年代後半である。当時は、家庭生活における子育てに特化した支援として『子育て支援』という用語が用いられることが多かった。」<sup>(1)</sup> 子育て支援という言葉が普及していく社会的背景のひとつに女性の社会進出が進みそれに伴い働き方も男性同様に求められるようになり1986年に男女雇用均等法が施行され女性の働き方が社会に開かれるようになった。同時に働き方もより一層男性と同等に求められるようになり、子育てに対する負担感が増すことになっていった。

それに伴い保育所の子育て支援に対する期待と役割を求められるようになっていく。「保育所における子育て支援の政策的な取り組みは、1987年に『保育所機能強化推進費』として予算措置が始まり、1989年には、地域子育て支援拠点事業の源流となる『保育所地域活動事業』が創設された。さらに1994年のエンゼルプラン策定以降、保育所には、地域に存在する最も身近な児童福祉施設として、子育て支援の役割がより積極的に求められるようになる。1997年の児童福祉法改正では、保育所の地域子育て支援、保護者支援の努力義務が規定され、保育所における家庭支援の法的位置づけが明確となった。」<sup>(2)</sup>

2008年改訂の保育所保育指針（平成20年告示）では第6章に保護者に対する支援のあり方が以下のように明記されている。「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第1章（総則）に示されているように、その特性を生かし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して、積極的に取り組むことが求められる。」<sup>(3)</sup> と記載されており以下の3つの項目が示されている。

#### 1 保育所における保護者に対する支援の基本

- (1) 子どもの最善の利益を考慮し、子どもの福祉を重視すること。
- (2) 保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有すること。
- (3) 保育に関する知識や技術などの保育士の専門性や、子どもの集団が常に存在する環境など、保育所の特性を生かすこと。
- (4) 一人一人の保護者の状況を踏まえ、子どもと保護者の安定した関係に配慮して、保護者の養育力の向上に資するよう、適切に支援すること。
- (5) 子育て等に関する相談や助言に当たっては、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者一人一人の自己決定を尊重すること。

- (6) 子どもの利益に反しない限りにおいて、保護者や子どものプライバシーの保護、知り得た事柄の秘密保持に留意すること。
- (7) 地域の子育て支援に関する資源を積極的に活用するとともに、子育て支援に関する地域の関係機関、団体等との連携及び協力を図ること。

## 2 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援

- (1) 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援は、子どもの保育との密接な関連の中で、子どもの送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信、会合や行事など様々な機会を活用して行うこと。
- (2) 保護者に対し、保育所における子どもの様子や日々の保育の意図などを説明し、保護者との相互理解を図るよう努めること。
- (3) 保育所において、保護者の仕事と子育ての両立等を支援するため、通常の保育に加えて、保育時間の延長、休日、夜間の保育、病児・病後児に対する保育など多様な保育を実施する場合には、保護者の状況に配慮するとともに、子どもの福祉が尊重されるように努めること。
- (4) 子どもに障害や発達上の課題がみられる場合には、市町村や関係機関と連携及び協力を図りつつ、保護者に対する個別の支援を行うよう努めること。
- (5) 保護者に育児不安等がみられる場合には、保護者の希望に応じて個別の支援を行うよう努めること。
- (6) 保護者に不適切な養育等が疑われる場合には、市町村や関係機関と連携し、要保護児童対策地域協議会で検討するなど適切な対応を図ること。また、虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。

## 3 地域における子育て支援

- (1) 保育所は、児童福祉法第48条の3の規定に基づき、その行う保育に支障がない限りにおいて、地域の実情や当該保育所の体制等を踏まえ、次に掲げるような地域の保護者等に対する子育て支援を積極的に行なうよう努めること。

### ア 地域の子育ての拠点としての機能

- (ア) 子育て家庭への保育所機能の開放（施設及び設備の開放、体験保育等）
- (イ) 子育て等に関する相談や援助の実施
- (ウ) 子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進
- (エ) 地域の子育て支援に関する情報の提供

### イ 一時保育

- (2) 市町村の支援を得て、地域の関係機関、団体等との積極的な連携及び協力を図るとともに、子育て支援に関わる地域の人材の積極的な活用を図るよう努めること。
- (3) 地域の要保護児童への対応など、地域の子どもをめぐる諸課題に対し、要保護児童対策地域協議会など関係機関等と連携、協力して取り組むよう努めること。<sup>(4)</sup>

また「第1章の総則2保育の役割(3)保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである。」<sup>(5)</sup>として保育所の役割の中に子育て支援を位置付けている。

現在の幼稚園教育要領(平成20年告示)には第2教育課程の編成に「幼稚園は、家庭との連携を図りながら、この章の第1に示す幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう学校教育法第23条に規定する幼稚園教育の目標の達成に努めなければならない(以下省略)」<sup>(6)</sup>と書かれており家庭との連携の必要性が示されている。また第3章の第2の2に「幼稚園の運営に当たっては、子育て支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。」<sup>(7)</sup>具体例が文部科学省の幼稚園教育要領解説に書かれている。「全国の幼稚園において実際に行われている子育ての支援活動の具体例としては、子育て相談の実施(現職教員、教職経験者、大学教員、カウンセラーなどによるもの)、子育てに関する情報提供(子育て便りなど)、親子登園などの未就園児の保育活動、子育て井戸端会議などの保護者同士の交流の機会の企画などがある。これらの事例の他にも、園庭・園舎の開放、子育て公開講座の開催、高齢者、ボランティア団体、子育てサークルなどとの交流など、様々な活動が行われている。各幼稚園においては、地域の実態や保護者の要請に応じて創意工夫し、子育ての支援活動ができるところから着実に進めることが重要である。」<sup>(8)</sup>

このように幼稚園においても「地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること」が求められており「各幼稚園においては、地域の実態や保護者の要請に応じて創意工夫し、子育ての支援活動ができるところから着実に進めることが重要である。」とされている。しかしながら同じ文部科学省の幼稚園教育要領解説の中に「子育ての支援活動は多様であるが、幼稚園の実態に応じ、できることから着実に実施していくことが必要である。その際、教育課程に基づく活動の支障となることのないように配慮する必要がある。」<sup>(9)</sup>とも書かれている。

いろいろと支援の重要性は述べられているが、「教育課程に基づく活動の支障となることのないように」ということも述べられている。つまり教員によって支障がでると考えた場合はしなくてもよい支援があるということになる。

保育所においても児童福祉法第48条の3には「保育所は、当該保育所が主として利用される地域の住民に対してその行う保育に関して情報の提供を行い、並びにその行う保育に支障がない限りにおいて、乳児、幼児等の保育に関する相談に応じ、及び助言を行うように努めなければならない」と定めている。つまりこちらも「保育に支障がない限りにおいて」となっていて保育士によって支障がでると考えれば出来ない支援があることになる。

このように忙しい現場では保育士や教員が、子育て支援、家庭支援について無条件にできることは難しいことも予想される。そこで現在、保育所、幼稚園で日常的に行なわれていることの中で工夫することで支援につながるができないか考えたい。

## 2. 支援を意識した連絡帳とクラスだより、所長・園長だよりの活用

保育所でも幼稚園でも連絡帳は多くの園で活用されている。またクラスだより、ときには所長・園長だよりなども定期的に、あるいは不定期に発行されていると考える。

保護者にとっては保育所、幼稚園での子どもの生活の様子が知れたり、保育所、幼稚園の考え方が理解できたりする情報源になっている。

クラスだよりは我が子のクラスでの様子がわかったり、集団での取り組みが知れたりする役割を担っていることが多い。保護者からすれば保育所、幼稚園での生活を知ることができ子どもの普段の様子がわかる。集団の中での我が子の様子もわかり子どもの状態把握につながっている。またクラスで流行している遊びなどを知ることができることで家庭でもその遊びについての話題で楽しい時間を過ごすことができる。

所長・園長だよりは保育、教育の基本方針や園の行事や年間計画などを知る上では大切な役割を持っている。ときには所長・園長先生の考え方なども知ることができ、保育所、幼稚園の方針を具体的に知ることによって安心感が増すと考える。

このように連絡帳、クラスだより、所長・園長だよりもそれぞれの保育所、幼稚園で考えて活用されていると思うが、ここに子育て支援、家庭支援を意識した連絡帳の活用とクラスだより、所長・園長だよりの活用を考えたい。

### (1) 支援を意識した連絡帳の考え方

連絡帳の特徴としては本来、子ども一人一人の個別的なやり取りを意識して書いていると思うが、毎日のこととなるとどうしても「元気で遊んでいました」、「食事は残さず食べました」、「友達とも仲良く遊んでいました」などあたり障りのない事柄や一般的な表現になりがちだと思う。しかしこのような書き方だと子どものだいたいの様子はわかってもらう元気にしていたのか、食事は残さず食べたのは嬉しいが全体的な量はどうかだったのか、友達と仲良くしていた時もあったのはわかるが、トラブルはなかったのかなど、場合によっては保育士や教員が本当に我が子の様子を丁寧に見ていてくれたのか不安になる書き方でもあることも意識する必要がある。

原則として具体的に書くことを意識することが大切になる。例えば「園庭でA君、B子ちゃん、C君、D君、Eちゃんと鬼ごっこをして30分位、元気に遊んでいました。よく走って汗をたくさん書いたので着替えをしました。鬼ごっこを通して今まであまり遊ぶことがなかったC君とも仲良くなりました。二人ともお互いのことがわかったのがうれしい様子でその後の食事の時間も一緒に座って食べていました。」

このように書くことで我が子の様子が具体的にわかり、友達関係の広がりも保護者に伝わることで場合によっては新たに仲良しになったC君のお母さんとも会話が増え仲良くなることも考えられる。また子どもの元気に遊んでいる姿がより想像しやすくなる。このように具体的な記述をすることで親としては保育士や教員が30分以上我が子のことを見ていてくれたことがわかり、信頼にもつながっていく。

保育士、教員も具体的記述を心がけることで子どもへの観察がより丁寧になり、現在の子どもの興味・関心を知ることにつながり今後の指導計画に役に立つというメリットもで

てくる。

連絡帳のもうひとつの役割として保護者に伝えるだけでなく保護者からの意見に答えられるということも大切なことで意思の疎通が図れるということがある。例えば保護者からの質問や疑問に丁寧に答えることができる。

普段の忙しい中でなかなか丁寧に保護者からの質問や疑問に答えることができないということもあると思う。また時間があっても周囲にほかの保護者や子どもがいては話せないこともあり、タイミングを逃しそのことが育児不安や心配事につながることもある。そういう場合を考えて連絡帳の活用を保護者にお願いしておけば、すぐに質問や疑問に答えることができ、無用な心配事は減ると考える。また保護者からの質問や疑問に丁寧に答えるには保育士、教員は日常的に学ぶことが必要になったり、普段何気なくしていることを改めて考えたりすることにつながり、結果的に保育士、教員の能力が向上すると考える。

大切なことは保護者との関係をより良くし信頼関係を築くことにより、保護者の育児不安を少しでも解消するという視点も持つことで連絡帳の役割が子育て支援に役立つことを意識することが重要になる。

## (2) 支援を意識したクラスだよりの考え方

クラスだよりを書くにあたっての原則はわかりやすさ、読みやすさを心がけることと読み手が大人であることを意識して書くことである。またいろいろな保護者が見ることを考え、プライバシーに配慮しながら書くことが求められる。

読みやすさを意識しクラスだよりを作成する場合現在の保護者世代ならではの注意点もある。携帯世代、メール世代ともいわれ長い文章が苦手な保護者もいることを考え、文章を簡潔に書くことも大切になる。読みやすさを考え、今の親世代になじみのある絵文字やイラストを使用してもよいかもしれないが、過剰に絵文字やイラストを使わないことも同時に考えておくことも必要である。また指示的な表現は使わず保護者が必要となる情報を書くことを意識する。

クラスだよりに子どもの名前を載せる場合には、注意が必要でクラスの子ども全員がクラスだよりに名前が載ることが大切である。一度のクラスだよりで全員の子どもの名前を載せることが難しい場合は次のクラスだよりに今回名前を載せられなかった子の名前を載せることが大切になる。書く方から考えたら大変だと思うが、保護者にとっては自分の子どもが載っていないクラスだよりは不安材料になる場合があることを意識することが必要である。

書き方の例としては遊び場所で分ける方法がある。例えば大きく4つに分けて考える。1つは室内遊びを中心に書く、2つめは外遊び、3つは遊戯室等での遊び、4つはその他の場所での遊びでの様子を書く（例えば散歩での様子や廊下や階段等のスペースでの遊び等）。こうすることでそれぞれの子どもが得意分野で遊んでいる様子を伝えられるとともに、保育士、教員も改めて子どもたちの遊びの状態、仲間関係を把握することにつながる。

保護者にとっては園での子どもの活動や遊びの様子がわかり家庭での遊び方にも役立てることができる。また友達関係もわかり、保護者同士の関係づくりに役立つこともある。



クラスだよりの基本としては子どもの悪いことは書かずに楽しいこと、話題性、現在のクラスでの流行していること、行事への取り組み、子どもの活躍、頑張っていること等を書くことが大切になる。なぜ子どもの悪いことを書かないかについては、なぜクラスだよりがあるのかを考えればわかると思う。クラスだよりは子どもたちの日々の生活の様子を伝えることにより、保護者が安心して子どもを園に預けやすくすることが役割のひとつになっている。

クラスだよりで子どもの悪いことを取り上げれば全体の保育・教育に対して保護者は不安になる場合があり、無用な不信感を与える可能性がある。子どもの悪い行いを良い方向に導いたり、ルールやマナーの必要性を伝えたり教えたりするのは誰の役割か考えれば理解できると考える。例外的に子どもの悪いことを取り上げ現在クラス全体でその問題に解決するために努力しているというような書き方であればよいかもしれないが、よほど慎重に書かなければ誤解を生む危険性もある。

子どもの悪いことをどうしても保護者に伝えなければならない場合は直接会い時間を取って伝える方が有効であり、誤解を招く恐れは低くなる。

最後にクラスだよりを発行するときに家庭支援、子育て支援も意識した紙面になっているか考える。また子どもの名前を載せるときには子ども一人一人の名前のチェックをすることで改めてクラスの子どもたちの様子の把握ができる。このことは具体的な連絡帳への記述にもつながっていく。

### (3) 支援を意識した所長・園長だよりの考え方

所長・園長だよりは保護者の不安になるようなことを予測して伝えていくことや、この時期だからこそ必要な情報等や園の方針をわかりやすく伝える役割があると考えられる。

例えば「0歳児クラスでは離乳食が始まりましたが個人差がありますのでよく食べる子と口から出してしまう子がいました。しかし今はどちらのお子さんも美味しそうに食べています。」等、子どもは個人差があること余りあわてないことなどを説教や注意などにならないように書くことで離乳食がうまくできていない親へのさりげないアピールになる。また時には家庭でできる簡単で子どもが喜ぶレシピなどを調理師さんに教えていただいて紹介するなど具体的な内容も保護者にとっては助かる情報ではないかと思う。

また、その時期に合った情報も保護者にとって助かることがある。例えばインフルエンザの予防接種がいつからどの病院で始まるなどや園児の兄弟が通学している学校でインフルエンザに罹患した子どもがいました。または本園でノロウイルスに感染した子どもがいましたなど、なかなか書きづらいこともあるが予防する観点からは有効だと考える。また子どもの体調が悪い時に早めの対応につながる。こうすることで感染症の予防にもつながる。

保育所、幼稚園が行う行事の意味や意図がなかなか保護者の方々に伝わりにくいこともあるので所長・園長先生から行事についての意味や意図を保護者に伝えることでより積極的に行事に参加してくれることもあると考えられる。

ときには所長・園長先生の人柄がわかるようなコラムを載せ所長・園長先生と保護者の精神的な垣根を低くすることにより、声をかけやすくなり、そのことを通して保育所、幼稚園への理解が進むことも考えられる。

所長・園長だよりはなるべく保護者の不安をなくしたり、情報提供を行ったり、保育園、幼稚園の行事等の基本方針を伝えたり、所長・園長先生の考え方や人柄を伝えることで方針等が伝わりやすくなり、そのことで保育所、幼稚園への理解が進み無用な不安の軽減につながると考える。また苦情対策にも有効で普段から所長・園長先生との信頼関係ができていれば早めの対応ができる可能性が高く苦情になる前に対処できることもある。仮に苦情になったとしても信頼関係ができていますので丁寧な対応をすることで保育園、幼稚園への理解が進み、逆に評判が向上することにつながることも考えられる。

普段の仕事のひとつである所長・園長だよりを少し工夫することで家庭支援、子育て支援につながるができるという発想を持つことが大切だと考えている。

### 3. 気になる子どもへの支援

保育園、幼稚園に通園する子どもの中に「気になる子」という言葉で保育士、教員が表現する子どもがいる。この「気になる子」には保育士、教員から見ると大きく分けて二つが考えられている。

ひとつは明らかに障害があると考えられるが、保護者が気付いていない場合や不安や疑問を感じているがまだ幼いので様子を見たいと考えていたり、認めたくなかったりと理由はそれぞれだが専門医に診察を受ければ障害があると診断を受けるケースである。

他方は「障害があるわけではないが、健常児と言われる普通の子どものとは違い、個別に対応が必要な子ども」というような子どもである。本稿ではこの後半の子どもについての支援の考え方を提案したい。

本稿で取り上げる「気になる子」の言葉の定義のひとつとして『「気になる子ども』は日常用語で、しっかりとした定義はありませんが、①認知や行動・運動・感情などの発達に関すること②集団生活を送る上で周囲に迷惑をかける（たとえば、衝動的な行動をとる）など同年齢より注意力や抑制力が少ないことに関すること③緊張が強くて友達と遊べないなど対人関係・社会性に関すること④親の子どもへのかかわり方や養育への関心の薄さなど家庭環境に関することなどで、保育者が気になっていて、かならずしもはっきりした発達障がいを示していないが家庭環境上の問題がある子どもや軽度発達障がいの特性を示している子どもなど」<sup>(10)</sup> 特徴的な状態の子どもたちではあるが支援としての基本は「気になる子」から学ぶという姿勢と変わった行動や言葉のぎこちなさや対人関係には多くの場合理由があることを理解しておくことが大切になると考えている。

初めに確認しておきたいことは「気になる子」は誰にとって気になるかの理解である。例えば保育士、教員10名がその子の遊びの様子を時間で区切って観察した時にすべての時間、すべての教員が「気になる」ということはあまり多くなく、遊びや行動の捉え方がわかれる場合も出てくる。これはなぜか、保育士、教員の性別、年代、性格、育った環境、子どもの頃の遊び等が影響していると考えられるからである。

例えば虫好きの子どもがトンボの羽をハサミで切ってしまったり、バッタの足を取ってしまったりする遊びをしている様子を見て残酷でいけない遊び、場合によってははいけないことで遊びではないと考える保育者、教員もいると思う。つまり残忍なことを喜ぶ「変わった子」又は「気になる子」になる可能性がある。しかしながら子ども時代を自然豊か

な田舎で生活し遊んだ経験のある保育士、教員は自分もそういう遊びをしていた経験からあまり問題だと思わないこともある。確かに残酷な行為ではあるが、ザリガニ釣りをするためにカエルの足を切って餌にした経験をしている世代からは遊びに見えることもある。

保育士や教員はまず自分たちの価値観や保育内容等がある程度共通理解し必要なところは見直すことから始めなければならないと思う。

保育所保育指針には一人一人の発達過程に応じて保育をすることや自己を十分に発揮できる環境を整えることが示されている。幼稚園教育要領には幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようすることや幼児一人一人の特性に応じ、発達課題に即した指導を行うことが記されている。

保育士や教員は普段の保育の方法やねらいが「気になる子」にとってわかりやすくなっているのか、保育・教育内容が本児にとって興味・関心の持てるものであったか、我慢をしたり、保育・教育の進め方が早すぎたりしてはなかったか、環境は整備されていたかなど改めて点検する必要があると考える。

場合によっては「気になる子」に合わせた指導計画を考えその計画をもとに実践したとき「気になる子」はどういう状態であったのか、振り返り、検証することは大切である。

「気になる子」を通してもう一度保育・教育内容を見直すことにより、より柔軟性を持った保育・教育内容になっていくことになる。

また「気になる子」の中には家庭での状況を把握することで改善につながるケースもある。

お母さんからの相談で4歳の女の子で言葉の遅れや表情の乏しさから発達障害の疑いがあるとの主訴を受けて面接をしたことがある。下に2歳になる女の子がおり、最近はお手がかかるようになってきて大変だが父親は仕事が忙しく子どもたちが寝てから帰ってくるような生活をしているとのことであった。

母親は家事をスムーズに行うために4歳の姉のほうにいわゆる教育ビデオを一日6時間から8時間近く見せていることがわかった。本児はお気に入りのビデオが何本もありそのビデオを見ているとわりと大人しくしているとのことであった。妹のほうも数時間姉と一緒に見ていてくれその間に家の仕事が出来て助かっているとの話であった。

私はこのビデオが本児の問題につながっていると考えなるべくビデオを見る時間を少なくするようにお願いした。そのことを母親が実践してから3週間後、連絡があり本児の状態を聞いたところ表情が豊かになり、喜怒哀楽がはっきりしてきたとのことであった。ぎこちない話し方はまだ残っているとのことであったが、語彙数は増えてきたとの報告であった。

このケースは家庭でのいきすぎたビデオの視聴をやめることで改善された例である。

この他スマートホンでのゲーム等が原因で落ち着きがなく理解力が乏しいとみられる子どものケースもあった。

幼稚園から「気になる子」として相談を受け、落ち着きのない子どもの生活を母親から丁寧に聞き出した。母親が持っているスマートホンを使ってゲームをしていてスマートホンを母親が使用していないときゲームをしてもよいことになっている。ゲームがやりたいために母親がスマートホンを使っていない時間ばかり気にしている状態であることがわ



かった。そのことに神経を使っているために、その他のことは上の空であり、またどうしてもおそくまで起きている日が多くなり、寝不足の状態が続き、その結果その子に必要な情報の入りが悪くなっている状態であった。そのために出来ないことや忘れ物が多くなり、うまくいかず、落ち着きがなく理解力が乏しくいように見えていたケースであった。

保護者の方にスマートホンの使い方について子どもとの間にルールを作っていただき使い方を守ることによって子どもの落ち着きのなさが改善され、行動にも変化が表れ出来ることが増えたとのことであった。

いずれの場合も保護者の方に子どもの様子を丁寧に伝え、こちらからの提案に取り組んでいただくことで子どもの状態が改善したケースであった。

子どもの支援をすることが結果的には家庭支援につながり、保育・教育の見直しにもつながる。

#### 4. 地域支援を意識した園庭開放と絵本の貸し出しの提案

保育所、幼稚園にも地域支援が求められており、支援の柱として期待されている。そこでできれば月に2回、難しければ月に1回でも良いので無理のない範囲で園庭開放をぜひ日曜日に行っていただきたいと提案したい。

地域に生活している小さい子どもを持つ保護者の中にはなかなか保育所、幼稚園に足を運ぶのをためらう方も多く考える。理由としては、「何も用事がないのに園庭に入って遊んで良いのだろうか」という思いではないかと考えられる。そこで園側が積極的に日曜日園庭開放事業として広報をすることを通して園庭で遊びやすくなるのではないかと考える。また日曜日であれば普段仕事で忙しい父親との遊びも期待できる。保育所・幼稚園であれば遊具がそろっており、何をしてあそんでよいかわからない父親にとっては助けになる。

もうひとつの工夫は日曜日の絵本の貸し出しである。午前中だけでもいいので保育士や幼稚園の教員が当番でひとりずつ参加して貸し出しをお願いしたい。地域の小さい子どもを持つ保護者の方と顔見知りになり、本を借りるついでに絵本の選び方や読み聞かせのアドバイスなども教えて頂く機会が増えれば、やがて信頼関係が生まれ相談も出来るような関係になると考えている。

幼稚園であれば満3歳から入園の子ども達なので0歳から2歳児までの絵本についてはあまり考えなくてもよいが、未就園児が絵本を借りに来るようになれば0歳からの絵本についても考える必要が生まれ、教員としても新たな年齢の絵本の勉強をするきっかけとなる。また3歳以上の絵本であっても絵本を借りに来る子どもの好みや、保護者の要望によっては絵本の種類を増やすことも考えなければいけないので、新刊本にも目がいくようになり、結果として絵本の知識が増えることになる。

その他の効果として地域に顔見知りが増えれば散歩のときなどに挨拶を交わすことも多くなり地域に保育所・幼稚園を知っていただく機会も増え、例えば子どもの安全にもつながっていく、車の往来が激しい時などは気をつけるように声をかけて下さる事もあると思う、また不審者を防ぐ効果も生まれる。

このような活動を通じて保育所や幼稚園をよく知ることにつながり、地域の保護者の孤立を防ぐ効果も期待できる。また保育所、幼稚園を選ぶときに参考になり、信頼関係が築

かれていれば入所・入園につながるのではないかと考える。

在園児にもメリットがある。例えば子どもの担任の先生の時に絵本を借りに行くことで、普段ゆっくりと話が出来ないこともこの時ならば話が出来るというメリットも生まれ、心配事についても早めの相談につながれば保護者の不安軽減につながる。こうした機会を増やすことが地域支援や家庭支援につながると考える。

## 5. おわりに

家庭支援、子育て支援や地域支援の必要性は理解されていると考えるが保育士、教員の忙しい仕事の中でなかなか充実した支援は難しいのが現状ではないかと考える。

保育所においても児童福祉法第48条の3には「保育に支障がない限りにおいて」と示されている。また幼稚園においても「教育課程に基づく活動の支障となることのないように配慮する必要がある。」<sup>(9)</sup>とも書かれている。だからといってただ難しいと嘆いても現状は変わらない。

そこで支援に対しては現場に負担をなるべくかけない工夫が必要ではないかと考える。

例えばもっとも簡単な地域支援としては保育所・幼稚園が主催する講演会があるときにそのお知らせを保育所・幼稚園の室内に向けて張ればそれで終わりだが、外に向けて（車道や道の側）に張れば支援につながると考えている。

その理由は講演会の情報を提供することも立派な支援につながると考えるからである。例えばその講演会を聞くことで子育てに関する新たな知識が増えたり、情報が増えたりすればそれは家庭支援や子育て支援になると考えるからである。

普段の仕事の中で様々な支援の方法を考え意識することであまり負担をかけなくても出来る地域支援や家庭支援もあると考えている。そしてそのことがきっかけとなり少しずつでも家庭支援や地域支援が広がり充実していけばよいと考えている。

## 引用文献

1. 日本保育学会編「保育学講座5 保育を支えるネットワーク支援と連携」東京大学出版会 2016年 73頁
2. 同上 73頁
3. 厚生労働省「保育所保育指針（平成20年告示）」フレーベル館 31頁
4. 同上 31, 32, 33頁
5. 同上 4頁
6. 文部科学省「幼稚園教育要領（平成20年告示）」フレーベル館 4頁
7. 同上 16頁
8. 文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成20年10月）フレーベル館 239, 240頁
9. 同上 240, 241頁
10. 柴田 正行（編著）, 「障がい児保育の基礎」, わかば社, 2014年, 44頁

## A Consideration of Supporting Home of Children in Early Childhood

TOBITA, Takashi

I expound the way of thinking on supporting home and present main support at this time.

To make support effective, I propose supporters to widen their view. For example, “Liaison Notebook” —— which has been used as a way of communication between parents and teachers of kindergartens or nursery schools —— can be a better support by introducing a new device. So can be “letters from School” and “Director’s Letter” .

Another proposal is to increase chances for parents to learn children’s action. By understanding children’s action, parents’ “frustration” and stress may diminish. That can be one of good supports for children as the result.

I also refer to support for “Kininaru-ko”, children who must be carefully watched in kindergarten or nursery school.